

はじめに

家近 亮子

2022年2月24日木曜日は、忘れられない一日になった。ロシア軍がウクライナに大規模な軍事侵攻を開始したのをテレビの映像で目の当たりにしたからである。それから、連日のように「ウクライナ戦争」の報道が続き、現在（2023年2月）に至る。

国際学部に長く勤めている教職員の多くは、その時ウクライナからの留学生で、キーウに住んでいたパンコーヴァ オルガさんに思いを馳せた。オルガさんは、2010年3月に国際学部を卒業し、その後キーウに戻って大学院に進学し、修士課程修了後はウクライナ外務省に、2012年の8月からは在日ウクライナ大使館に勤務した。ウクライナへ帰国後は日本語教師として活躍していたところ、ロシア軍の侵攻に遭ったのである。

オルガさん救出は、まず本学ゼミ（庄司真理子ゼミ）の卒業生が動き、開始された。オルガさんが在学していた当時、国際学部は国際協力学科であったが、その卒業生は国際協力機構（JICA）に勤務後、今は国際機関の一つで活躍している。2022年3月14日、オルガさん一家が日本に到着した。国際学部の教員たちは一致して支援に向かったが、それを知った三幣利夫理事長がオルガさんを職員で雇うという英断を下されたのである。

オルガさんは4月から本学の地域連携センターの職員として、本学ばかりでなく、周辺はもとより、地方の中学や高校などでも講演を行い、戦争の悲惨さと平和の大切さを自分の体験をもとに生徒や学生たちに訴えてきた。本号には、2022年10月13日に行われた本学の学生向けの講演会の記録が掲載されている。

2022年度は、国際学部の開設25周年にあたる。本学部にはこれまで様々な国から多くの留学生を受け入れてきた。留学生に対する教育は、一貫し

て取り組んできた大きな課題であるが、その基本が日本語教育と日本理解にあることは変わっていない。

本号の特集「留学生の日本語教育の歴史と課題」の長谷川頼子氏の論文は、副専攻である日本語教員養成課程を最初から担当してきた同氏ならではの内容となっている。本学の同課程修了者は2022年までで197名に至るが、その約半数が留学生であることから見ても本研究で行われた調査が如何に貴重であるかが分かるであろう。

また、土弘信彦氏の実践研究は長年の海外勤務で培った経験をもとに日本の留学生政策の現状をまとめて、その課題を抽出し、解決方法を示唆する内容となっている。共著者となった本学 IR・広報室長の工藤龍雄氏は2021年度から本学が取り組んでいる「留学生就職促進教育プログラム認定制度（文部科学省）」申請に向けたデータ分析などを担当し、その成果をホームページで公開しているため、本特集に参加することとなった。

さらに、国際学部の学びの中心の一つである英語教育の Debate をテーマとする Lara Prominitz-Hayashi 氏の論文、英語教育研究会が行っている中高の英語教員を目指す学生に効果的な取り組みを扱った井上茂氏の実践研究など国際学部ならではの多彩な内容で、記念の年にふさわしい内容になっていると言える。